

竹久夢二の短歌

安 森 敏 隆

竹久夢二は、画の方面においてもそうであったが、短歌にお

いても特に師をもったわけではなかった。「明星」の隆盛期に青春をむかえ、殊に同世代の北原白秋や石川啄木からの影響を受けながらもそれに決して束縛されることなく五七五七七のリズムを自由に駆使したのである。大正七年に茅野雅子を中心におこされた「春草会」に入会したものの、この会は主宰者も雑誌も持たず、当時の歌壇からは、かけはなれた短歌会（サロ

ン）であった。夢二の詩がごく自然に七五調を基調にしたように、短詩を口ずさむように五七五七七のリズムをおりなしたのである。竹久夢二の短歌は『夢二画集 夏の巻』（明43・4、

洛陽堂）、『夢二画集 花の巻』（明43・5、洛陽堂）、『絵入歌集』（大4・9、植竹書院）、『小夜曲』（大4・12、新潮社）、

『絵入歌集 暮笛』（大5・12、三陽堂書店）、『山へよする』

（大8・2、新潮社）に、それぞれ収められている。

『夢二画集 夏の巻』は菊判・カバー付・仮綴の本で、前年暮に出た『夢二画集 春の巻』（明42・三、洛陽堂）が好評を得て版を重ねる中で刊行されたものである。「世の人々のころに映る自分の幻影は、常に、美しく、好きものでありたい。」ではじまる前付につづいて、

夏の日は赤くぬりたるポイラアと爛れし彼が傷口に照る

という一首が、一と月後に出た『秀才文壇』X・IIに載った「赤きポイラアと彼の傷口」という画と組みあわされて載っている。短歌はこの一首を入れて百十九首で、以降三首ずつの組で画と画の間に載せられ、最後の「南洋へ」七首のみが三頁に

わたっている。

ほろほろと君の涙に漂へり理解されざる二つの心

よよとばかり君泣くゆへに泣くゆへにまろき肩抱き許すと

言ひぬ

ふと思ひぬかかる所にこの君とかかることとして月を見しと

ぞ

牛の子等いとおとろきて見てありぬ君がリボンとわが長髪

を

落日は手負の如く赤かりき白馬に君をぬすみ去る時

盗みいだし君を抱きて馬により春の街をばのがれいでしが

集中、恋人と思える「君」をうたった歌が多く出てくる。この期、明治三十九年（一九〇六）十一月、早稲田鶴巻町の絵ハガキ店つるやではじめて出会い、そして同棲し、結婚し、明治四十二年（一九〇九）五月には協議離婚した岸たまきを原型としながらも、決してそうとのみ断定する必要はなさそうである。夢二が出会ったさまざまな女性と夢二がつくりあげた（あり得べかりし）女性像の形象化がここにはあるのである。

竹久夢二の短歌

南洋へ

横浜海岸なる煉瓦街に髪黒き母の顔には似も

やらで、名も、行衛さへ知らぬ仏人に似て生

れたる不幸なる雑種児の友ありき（七首）

アフリカの王たらむとてチャムバレルに文をくりし雑種
児の友

南洋へともゆかむと陰謀を椎の木かげにめぐらせしかな
生きのこり名しらぬ島に漂流しそこの王子にならむと言ひ

ぬ

卓上に土製の兵士戦はせいづれおとらぬ暴君なりし

手を結び若草にねて南洋の森と自由を語りけるかな

母を捨てよわれは少女を捨てむとて窓の下にて二人は泣き

ぬ

アフリカにわれ王たらば必ずと君は馬関を船出せしかな

『夢二画集 花の巻』は、菊半裁判・カパー付・仮綴のポケットにもはいる小型本である。セピア単色画四十葉と色刷木版画五葉があり、八十一首の短歌と詩で構成されている。

竹久夢二の短歌

一一六

ノックの音——扉ドひらけば春や来し花の如くも君立ちたまふ

まれびとは何も答えず夕禪ゆげんの袂たもとかさねて笑みておはしぬ

『何故にかくれたまふや灯ひかりのかげに』『うれし涙をかくさむために』

新開しんかいの街まちのはづれに紅色べにいろの提燈ちとうつけばオルガンの鳴る
初夏しゅなつの風は海より麻の葉あしなの浴衣ゆかたの袖とバナナを吹きぬ

先ず冒頭の歌から「春」を導入し、花のごとき「君」をうかびあがらせている。そしてそのまれびととしての君の着ている「夕禪ゆげんの袂たもと」を描くことによってこの一卷はみごとな一つの絵巻物としての構成をとってゆくのである。

相見れば大いなる眼をわれに投げ紅べにさし指をかみたまふ癖
楽終へてソファーによりてはてりたるわが耳吸ふを好みた
まひぬ

なにゆへにうつむきたまふ頸うなじぞと吸へば微笑む山百合の眉
灯ひかりのまつや泣けば可愛いとゆき子なりけり露の瞳ひとみも襟えりのほくろ
も

江戸川や電車の皮をとりたまふ白き腕かたむねと窓の葉ざくら

「大いなる眼」と言い、「わが耳吸ふ」「山百合の眉」「露の瞳ひとみ」「白き腕かたむね」と言い、集中まことにリアルで具象的な描きかたが散見する。ここでも目の大きな岸たまきが彷彿するのであるが、これも夢二式の好みの女性像にまで普遍化されたものとして鑑賞してもよからう。

『いづこへ』と人にきかれてさりげなく『あてなき旅』と笑みて答へぬ

夢二にとって、『いづこへ』と『あてなき旅』は彼の夢をつむぐための源泉のようなものであった。恋人をもとめ、絵をもとめ、理想をもとめてのあくなき旅は、この明治の末頃において人々の共感と希望を生み、この一卷も飛ぶように売れた。

『絵入歌集』は小四六判・函入で「すべて私の記憶にある歌ですきなだけ百首撰むだったのでした。」と前付で言っている。つづいて「歌だけおぼえてゐて、作者をわすれたのもあるのです。或は歌も原作と違つておぼえてしまったのもありはせぬか

と氣遣われるので、わざと作者の名は省くことにしました。」
と言っているように、夢二の好みにしたがって万葉集から近代
までの百首を選んで、その対向頁に墨絵、ペン画、石版、コロ
タイプなどの絵を添えて構成したものである。収録範囲は万葉
集、和泉式部集、千載和歌集、新古今和歌集などの古典や北原
白秋、若山牧水、吉井勇、与謝野晶子、斎藤茂吉、石川啄木、
尾山篤二郎などの近代の歌人達の歌である。なお長田幹雄氏の
詳細な調べ（『初版本複製竹久夢二全集解題』昭60・3、ほる
ぶ出版）によって『大正一万歌集』（尾山篤二郎編）の中に出
てくる無名の歌人たちの歌も多くとられていることがわかった。
夢二自身の作品は三首である。

白しろき手てをわれにあづけて泣なく人のあはれや肩かたのこの細ほりや
う。

ぬぎすてし小袖こそでのごとくうちしほれ泣なきあるきみにせまる
たそがれ。

辻褄つじまのあはぬ話はなしもおもしろやかきのぬぐのうその涙なみだも。

『小夜曲せれなぶと』は三五判の処女歌集である。表紙に「SELE」

竹久夢二の短歌

NADE」と横文字で書かれ YUMEZI TAKEHISA と署名され
ている。全体は八章から成り、二百三十四首の歌が一頁一首組
で載っている。三行書きを基本として、二行や四行の歌も散見
する。もともと三行書きの短歌は土岐哀果らによって近代短歌
にもちこまれ、石川啄木の『一握の砂』によって普遍化された
ものである。夢二の短歌が啄木や白秋から影響されたことは否
めないが夢二独自のロマンチズムの開化もみとめられる。

殺ころすとも

そなたはそなたわれはわれ

ふたつの死骸か、はりもなし。

越この海うみや

こ、はふたりが死し所ところ

仇かたみなれども手てをとりてなく。

なげだせし命いのちなれども

殺ころしえぬ

憎にくきそなたは仇かたみか味方みかたか。

この指を

この白き手を

この肌を

さすとも恨なきにと泣けど。

きみ刺さは

われもいかでか死なざらむ

死にゆくものに何の償ぞ。

最初の「北越行」は、大正四年二月に富山県泊町小川温泉に

たまきを呼び寄せ、

恐るべき問題は

彼がしきりに肉に関する書物をよむこと、歌をつくるこ

と、また肉感をかいた絵をかくこと、その彼女を漁つ

てあるくことだ。また彼女が長野の夜に、狗が女にあたへ

る快感について語り非常に感能的になつたこと。

そして対称を弄ぶ態度を示したこと。

後に、「こんなにないつもよくしてくれ、ば、なんにもほか

ではしないのよ」と吐息をしながら言つたことだ。

俺はそれを聞いて慄然とした。

それは外でしたといふ裏書ではないか。

しかし泊の雪の夜、刃の下で言つたことは

「なんにもしないのにそんなことを言つてくやしい」と言つて、かなぐりついた。

それはどの程度にしなかつたのか、彼の口を信ずることは

出来ない。何故なれば彼の理性は正しく純だけれど、感情

がたかぶつたときは意識が明確でないから。

また彼女は校長のときの肉をはじめは否定してゐたのに、

この頃になつて、やつと実を言つたではないか。

肉に関する記憶は、だれしも好い記憶として残るものでは

ないから、自分の心でもいつの間にか否定してしまふのか

もしれない。

『夢二日記一』

といった刃傷汰沙にまで発展した愛の葛藤がモチーフとなつて

いる。夢二はたまきをこの北越の温泉に死ぬ気で呼びだしたの

だろう。つづく「港屋風景」は、日本橋区呉服町二番地に港屋

を開店した折に知りあつた笠井彦野との純なる愛の歌ではじ

まっている。

なつかしき娘とばかり思ひしを
いつか悲しき恋人となる。

あはれまた

泣きたまふかや たまさかに
逢へる今宵ぞよきことを言へ。

春なれば

ほのかに花も咲きつらむ
そよらと人の帯やとくらむ。

手にまけば恨はながし
かいだけば命みじかし
きみが黒髪。

なげけとて

ヂング・ダングと鐘の鳴る

竹久夢一の短歌

わけて暮春はもの、かなしき。

またみむはいつの宵ぞも

月草の

あはれ今宵も咲きいでにけり。

仇情

かけまじものどちかひしを
恋なりしとは君も知りしや。

なお、「海辺哀歌」「樹下低唱」「旅愁」「恋慕夜楽」の歌の多くは前著の『昼夜帯』（大2・12、洛陽堂）から採られている。

『絵入歌集 暮笛』は小四六判・帙付である。「先に出された『絵入歌集』の増補改版されたもの」と前付でふれているが、実際は十三首差し替えただけで前と同じ百首で構成されている。それにとりもなつて当然絵の方も十三葉新しくなっている。さらに歌はそのままで絵だけ変えたものが三葉ばかりある。あとのものは前著『絵入歌集』と同じであるが少しばかり順序が入れ替っている。新たに採りあげられた歌と絵は次の十三首である。

竹久夢一の短歌

ほそく^とそこらこ^ららに虫^{むし}のなく^{ひら}畫^が
の野^のにきてよむ手紙^{てがみ}かな。



水^{みづ}をみて流^{なが}る、水^{みづ}を見てありぬ日^ひはか
くてありもえしかど。





悲^{かな}しくも母^はがまつゆえ^{いもうと}妹^がまつゆえ^{いへ}家^へ
に今日^{けふ}もかへらむ。



まつり日^ひや見^み世^せ物^{もの}小屋^{こや}のかたはらの蚊^か
帳^{やぶくさ}釣^つ草^{くさ}にふる夏^{なつ}の雨^{あめ}。

竹久夢二の短歌

たそがれ
黄昏のよりどころなき魂か柳のかけを
かほり
蛸堀のとぶ。



かたて
片手なき人形ひとつまろびぬる木のか
あを
げ青き子供部屋かな。



竹久夢二の短歌



はるの海さして船ゆく山陰の名もなき港
春の海さして船ゆく山陰の名もなき港
晝の鐘なる。



戸なひきそ戸の面に今しゆく春のかな
戸なひきそ戸の面に今しゆく春のかな
しさみてりこよ何か泣く。

竹久夢二の短歌

港入り娼家の壁が落日にかがやけるこ
そかなしかりれり。



はたらかば母の氣嫌もなほるか
針と
りあげて涙ぬぐへり。





うらがなし^父歸りて君が^ま父のまへいふい
ひわけのおぼつかなしも。



妹よ^{いも}われも母を^は持たざりきおほかた
の日は^ひかなしかりけり。

竹久夢二の短歌

露路のおく酢倉の裏のくらがりに盲人のごとく泣ける三味線。



『山へよする』は菊半截判・上製・カバー付のポケット版で第二歌集にあたる。「五年間に渉るH EとS H Eとの恋の記述である」と「後記」でふれているように、夢二と彦野との出会いから別離をテーマとして短期間にうたわれたものである。先にも少しふれたが、夢二が彦野に出会ったのは大正三年（一九一四）十月のことであり、大正四年五月には二人は遂に結ばれる。別れたはずのたまきとの愛もこの間オーバー・ラップしながらも彦野との交情は昂進し、大正六年九月二十五日～十月十三日には石川県湯涌温泉山下旅館で彦野と思い出の時間をすごすのである。

湯涌なる山ふところの小春日に眼閉ち死なむときみのいふなり
木の実よりなほあたらしく若き野の草よりかろくよりそへるもの
ゆく秋の溪の沈黙のきはまりてしづかに我等臂をよす
さや／＼に葉ずれの音の涼しさをそがひにききて我等抱けり
さにづらふ木洩れ日のいろの紅の帯解きがてにきく山鳩の

ここには愛の初発性というか、原型がそのまま五七七七七のリズムにのつてうたわれている。が、この愛も大正七年にはいつて、その年九月、彦野は病み大分県別府町桶町中田医院に入院する。

入院

いまはこの事実を叙事的に書く余裕を持たぬ。
たよりない女は売られて行ったのである。

朝夕を共にせしものをこの家によしや死ぬともあらむとい

へど

病院より籠が来つるといふ声に布団の袖をかぶりて泣ける
吊籠に添うて歩めばとくくと妹が涙の音のきこゆる

「など死なむ君へ償を酬いずば売られしまゝになど死ぬべ

けむ」

など死なむ悲しきことを言ふなかれ生くることのみが正し
き証ぞ

さらに『山へよする』には「この一篇を、ちこへ。お前はすぐこれが読めるやうになるであらう。」と記された「愛児篇」が付されている。

やがて汝が玩具欲りせぬやうになり母なき責を父にやた
づねむ

「はや帰りてよ」かく言ひながらいだす手の柔かきかまな
んとすべけむ

泣くなかれはや帰りきて添寝してマルコの話またせうづも
の

いとほしき汝をのこしてなが父はいとしきものに逢ひに
ゆくぞも

すやくと眠れる吾子をさまさじと忍び足してバ、やゆき
けむ

「詞書」で言う「ちこ」とは次男不二彦の愛称である。また
「ヒコ」とも呼ばれた。

(本学教授)